



美術館だより

☎(63)7788

10月1日 「町立湯河原美術館」 がオープン!

湯河原ゆかりの美術館は、当館収蔵品による「常設館」と現代日本画壇の主軸として活躍している日本画家・平松礼二画伯の作品を展示する「平松礼二館」を併設し、館名を「町立湯河原美術館」に変更して、10月1日(日)にリニューアルオープンします。

オープンを記念して、下記の期間観覧料を無料といたします。この機会にぜひご来館いただき、リニューアルした美術館と作品の数々をご覧ください。

- 【期間】10月1日(日)~10月9日(月)
- 【対象】湯河原町、真鶴町、熱海市在住の方
- 【入館方法】受付で町民証(市民証)をご提示ください。

【開館時間】午前9時~午後4時30分(入館は午後4時まで)				
【休館日】毎週水曜日				
毎月第3日曜日の「家庭の日」は、町民の方は観覧無料です。				
＜おしらせ＞ 9月26日(火)~30日(土)は館内展示替え等のため、休館いたします。				
入館料 円	大人	600	500	400
	小・中学生	300	200	200
	一般		割引券	町民

~平松礼二画伯紹介~

平松画伯は1941年東京に生まれ、青龍社、創画会での活動を経て、現在は個展を中心に作品を発表しています。1989年山種美術館賞展大賞、2001年M A岡田茂吉賞大賞を受賞するなど繊細優美な作品を制作しつづけています。

1999年「印象派・ジャポニスムへの旅 - 平松礼二展」など全国各地で個展を開催。2002年には湯河原ゆかりの美術館で「革新への潮流 平松礼二展」を開催し、好評を博しました。

2000年より『文藝春秋』の表紙絵を担当。現在鎌倉市在住。



「湯河原(神奈川)」
(文藝春秋2006年8月号)

一喜一憂

戦後、日本の平和と経済繁栄に向かつてひた走りに走ってきたのは、その時代の大人たちだけではなく、わずか十五歳で親元を離れて働きに出なければ生きていけなかった多くの方々の苦労の上に、今、私たちは平和な日々を送っています。厳しい時代の経験を重ねてきた世代も七十五歳を超え、後期高齢期を迎えています。

九月十八日は、老人を敬う祝日。高齢者のほとんどは、毎日が休日であり、特別な休日が必要としていません。若い人たちは、高齢者のついでに休日がとれることにも感謝しなければならぬ「敬老の日」です。

人間は、頑健な身体を保つことだけで生きていくのではなく、自分の生活と環境とかがわり合いつながりながら生きています。高齢期は、体が老化したり故障があっても家庭や社会とかがわっていき考えが必要だと思えます。生涯を仕事だけに目を向け家庭を顧みなかった人人生の大先輩が逝去されました。最期の場に間に合いませんでしたが、半世紀以上を共にされた夫人から、ご主人の最初で最後の頼みごとは、「余命いくばくも無くなったら、体中の管を外してくれ」でしたと聞かされました。のどから管が差し込まれ声が出ない。小刻な震るるサインペンで、「チューブを抜いてほしい」と訴えた患者に医師はどう応えたのかはわかりません。夜半、握り締めていた手の力が徐々に弱くなり、それでも「ありがと」と、望みどおりの安らかな旅立ちであったそうです。延命と安楽死。表面化する「呼吸器外し」の判断は、医師が家族か本人か、結論は難しいと思えます。

年をとるにしたがって、誰でも他人の死の方に興味を持つものです。長寿に恵まれた人の最期には見事なものも多く、「富士山が見たい」と言って障子を開かせ、その翌日、八十九歳で目を閉じたのは吉田茂元首相。「もう、あきあきしたよ」と付き添いの妹に言ってお息を引き取ったのは九十

一歳のチャールズ元英首相。注射器を持ってきた主治医に「結構です。そっとしておいてください」と言ってお眠りしたのは、キヨリー夫人だったとか。充実した一日がさわやかな眠りをもたらすように、立派に使い切った一生は、素晴らしい死をもたらします。まず一日一日をしっかりと生きるのだと思います。

高齢化率が高い本町では、元気な高齢者が町の担い手にならざるを得ません。その方が高齢者にとつては元気を維持できるし、高齢者でなければできない生きがいに通じる仕事はたくさんあります。乱暴な言い方ですが、高齢者はできるだけ医者には行かず、介護サービスは受けずが幸いで、医療保険も介護保険も払い続け、掛け捨てで終わることが、よりよい生き方ではないでしょうか。

介護の世話になったため「寝たきり」になつてしまった事例はよくあります。「寝たきり」と聞くと、孤独で暗い雰囲気になります。酒好きで陽気な人気者のじいさんの話、脳卒中で寝たきりになりましたが、口が達者で、いつも人を笑わせ、病床は明るい笑いが絶えません。ある日、「どうせ寝たきりなら、そのデブデブの太った脇の下で、卵を抱いてヒナをかえしたらどうか」と連れ合いのばあさんが奇抜なことを思いつきました。そして、たるんだ脇の下に幾つかの卵を押し込み、やがて四月の暖かい日にヒナがかえりました。実際に寝たきりになれば、こんなのんきな毎日を過ごせるものはありませんが、寝たきりの人にありがちな絶望的な暗さがない、明るい話だと思えます。

人は、それぞれ苦しみや悲しみを幾重にも身にまとうて老いていきます。それが自然の姿です。卵をかえした老人は、残念ながら日本人ではありません。一泊二日で検査入院した病室で読んだフランスの小説家マリー・パツサンの短編小説に出てくる話です。

一喜一憂の主たる愛読者である中高年の皆さん、年老いても暗く錆び付いた老人のイメージから自分で脱出し、「朗人」として努めて明るい日々をお過ごしください。

町長
米岡幸男

